

茨木のり子 六月の会 会報 No. 77

第 77 号
2020 年 6 月 1 日発行

「茨木のり子 六月の会」

代表 黒羽根洋司
事務局 戸村 雅子
山形県鶴岡市本町 3-8-48
tel. 0235-22-7297



羽黒山の石段参道。ミシュランガイド三つ星認定の杉並木に囲まれた石段は2,446段。羽黒山中興の祖50代別当天有が、江戸時代の慶安元年(1648)から13年の歳月をかけて敷設したと言われています。(撮影:成澤孝夫。2020.5.14)

茨木のり子さんの「はたちが敗戦」という文章の中にこんなくだりがあることを戸村雅子さんに教えていただきました。

なにもかもが、しっちゃかめっちゃかの中、学校から動員令がきた。東京、世田谷区にあった海軍療品廠しょうじょうという、海軍のための薬品製造工場への動員だった。「こういう非常時だ、お互い、どこで死んでも仕方がないと思え」という父の言に送られて、夜行で発つべく郷里の駅頭に立ったとき、天空輝くばかりの星空で、とりわけ蠍座さそりざがぎらぎらと見事だった。当時私の唯一の楽しみは星を見ることで、それだけが残されたたった一つの美しいものだった。だからリュックの中にも星座早見表だけは入れることを忘れなかった。(『茨木のり子集 言の葉1』所収)

茨木さんが星空好きだった!? 私

茨木のり子さんと 星空・宇宙

山形大学客員教授 柴田 晋平

は学生の頃から現在に至るまで、ずっと茨木さんの大ファンなのですが、仕事は文学とは程遠い宇宙物理学の研究や夜は星空案内です。茨木さんへの思いは生涯片思いで終わりそうでした。しかし、この文章をよんで世界が一変。ちょうど、思いを寄せていた人が、同じように自分のことに興味を持ってってくれていたことを知った青年のように小躍りしてしまいました。

茨木さんはどういった思いで星空を見ていたのだろうと考えてみました。星がもつともたくさん登場する作品は「夏の星に」だと思います。

まばゆいばかり豪華にばらまかれふるほどに、星々あれは蠍座の赤く怒る首星アンタレス、永久にそれを追わねばならない射手座の弓、印度人という名の星はどれだろう、天の川を悠々と飛ぶ白鳥、しっぽにデネブを光らせて、頸の長い大きなスワンよ! アンドロメダはまだいましめを解かれぬままだし

「冠座はかぶりてのないままに」
そつと置かれて誰かをじつと待つ
ている「屑の星 粒の星 名のな
い星々」うつくしい者たちよ「わ
たくしが地上の宝石を欲しがら
ないのは」すでに「あなた達を視
てしまったからなのだ きつと」

(詩集『見えない配達夫』所収)

この詩に出て来る星や星座を見つ
けられますか。もしかしたら誰より
も茨木さんの方が星や星座を知つて
いたのではないでしょうか。印度人
という名の星が気になります。現
代の正式名称はインデアン座です。
今回調べて私も初めて知ったので
が、戦前は印度人座と誤訳され記載
されていたそうです。山形からは見
えない星座で、東京以南であれば図
のように夏の夜に地平線すれすれに
見えます。

現在私たちが見る星空は光害(人
工の光による汚染)が激しくて、茨
木さんがみた夜空とは全く違いま
す。東北大地震や先日の集中豪雨の
時の大停電の夜、そのときはなかな
か口には出せないのですが、後に
なつて、あの時見た星空は言葉には

表せないほど美しかったと多くの方
がおっしゃいます。まさに、宝石箱
をひっくり返したような美しい夜空
が広がっていたのです。



「国敗れて山河あり」という詩句
にあるように、人の世の移ろいやす
さに対して自然の悠久不変を対峙さ
せる表現は伝統的ですが、空襲のな
かでは眼前の草木も山も焼き爛れ、
山河・草木の自然のさらに外側で、
全体を包み込む宇宙という大きな器
があつて、その景色だけが残された
美しいものだったということだと思
います。

星空は、キラキラした美しいもの
に憧れる心を癒してくれるだけでは
ありません。私は星空案内をします。
これは妄想かもしれませんが、星空
を見たり宇宙の存在を感じることは
世界平和に貢献できるかもしれない、
と思つています。最も大きく自然を
包み込む器である宇宙から地球や地
上の人類の生活を見た時のちっぽけ
な印象と、必死に生活する日常の両
方を対比できる心を持つことはとて
も大事なことでとおもつています。
宇宙のような広い心で、自分の悩み
や、人類の歴史をながめてみよう
ということ。

このような捉え方を、茨木さんの
詩の中に見ることが出来ます。「ネー
ブルの樹の下にたたずんでいると」
(『対話』)、「水の星」(『寄りかか
らず』)、「惑星」(未刊詩篇より『茨
木のり子詩集』に掲載)などです。
さらに現代の天文学をとりいれる
と空間だけでなく時間の器もひろが
ります。私たちの体を作る有機物は
酸素、炭素、窒素などを含みますが、
宇宙が誕生した時にはこのような元
素は全く存在しません。水素とヘリ
ウムばかりでした。星の中でさまざま

まな元素が製造されて、星が爆発す
ることで元素が宇宙に広がり、それ
を材料にして地球、そして、生命体
が誕生しました。宇宙の時の流れの
中に人類を考えることもできます。
星空・宇宙が登場する茨木さんの
詩をあらためてかみしめる機会を
与えてくださった会報の担当の皆様
に感謝申し上げます。星空の美しさ
は人の心を惹きつけること、自然界
のもつとも大きな器である宇宙を感
じながら自分や世界を見直すことの
大事さが再認識されたような気がし
ます。

柴田晋平(しばたしんぺい)
さんは山形大学客員教授、理
学博士。専門は宇宙物理学。
科学文化の形成の活動をして
いる。星のソムリエ。
著書に『宇宙の灯台。パルサー』
(2006年)、共著に『星空
案内人になろう!』、夜空が
教室。やさしい天文学入門』
(2007年)などがあり、
現在山形新聞に「星空案内」
を連載中(週一回)。